

村上春樹・『飛行機：
あるいは彼はいかにして詩を読むようにひとりごと
を言ったか』

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 酒井, 英行 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.14945/00000435 |

村上春樹・『飛行機』——あるいは彼はいかにして詩を読むようにひとりごと

とを言ったか』

酒 井 英 行

「彼女」は、「結婚して、子供まで」いる（專業）主婦として設定されているが、その家族、「海外旅行を専門にする旅行会社」に勤めている夫と、幼稚園に通っている「四つになる女の子」が、行為を遂行する主体として、作品世界に登場するわけではない。「一度だけふとした偶然でその女の子を見かけたことがあった」という語りのなかに、言わば、「彼の視線の客体として、「彼女」の「女の子」が顔を覗かせるだけである。したがって、『飛行機』——あるいは彼はいかにして詩を読むようにひとりごとを言ったか』（『TVピープル』一九九〇年一月、文芸春秋、以後『飛行機』と略記する）の作中人物は、「彼女」と「彼」の二人と見做してよいだろう。「彼」は、専業主婦である「彼女」の家族の不在（空白）に忍び込むかのように、「彼女」の独り居の家庭空間に現れるのである。

ところで、『飛行機』には、作品の主要人物を等距離に俯瞰して、「彼」「彼女」と呼ぶ虚体の語り手がいるかのようなのである。『飛行機?』と彼は言った。／そう、と彼女は言った。「彼」と「彼女」を等距離に語り出す形式をとっている。しかし、「彼」を「僕」に置き換えても、『飛行機』が作品の表情を変えてしまうことはないのである。例えば、作品末尾の、「彼は思う。そう、その頃、僕はまるで詩を読むようにひとりごとを言っていたのだ。」の「彼」を「僕」に置き換えても、作品の読みに支障をきたすことはないはずだ。むしろ、「僕は思う。」のほうが座りがよいのである。『飛行機』が、「彼」

の視点に密着した語り、「彼」の視点からの語りになっているからだ。

あるいは彼女はただ誰かに抱かれて泣きたいため僕とつきあっているのかもしれない、彼はそう思うことさえあった。彼女はひよつとしてひとりりで泣くことができなくて、それでそのために僕を必要としているんじゃないだろうか。

語り（視点）の非対称と言う他ない。「彼」の内面が断定的に明示されているのに対して、「彼女」の内面は、「彼」の視点から（外から）推量することではか浮上しないのである。こうした語り（視点）の非対称は、「彼女」が「彼」（男）の視点から、「女」と言表されることがしばしばあるのに対して、「彼」が「彼女」の視点から、「男」と言表されることは皆無であることにも表れている。「彼女」は、「彼」によって、解釈され、意味づけられる存在として、「彼」の前にいるのである。しかし、客体化して支配しようとする暴力性が「彼」にあるわけではない。「彼」の人格が投影された女性存在としての「彼女」が現存しているだけかも知れない。

「彼」こそが、『飛行機』の主人公だと、ひとまずは言えるであろう。『飛行機』が、「そう、その頃、僕はまるで詩を読むようにひとりごとを言っていたのだ。」という、「彼」の事実確認（自己確認）の感懐で締め括られているのだから。作品を通して、「彼」の視点人物の座が揺らぐことはないのである。

しかし、村上春樹が、作品のテーマを、視点人物という形式上の主人公に託している、と見るのは短絡的であろう。「彼の視線（感性）が捕えた「彼女」、「彼」の語りが浮上させた「彼女」こそが、『飛行機』で描き出そうとしたテーマを託された真の主人公と見るべきではなからうか。形式上の主人公・「彼」の視線（人格）によって、真の主人公・「彼女」の姿（生のかたち）を浮上させるといった作品構造に、村上春樹は何を仮託しているのであろうか。

彼は笑う。どうしてまた飛行機のひとりごとなんて言うんだろう。

彼女も笑う。そして右手の人さし指を使って、空中に浮かんだ架空の物体の長さを測った。それが彼女の癖だった。ときどき彼も同じようなしぐさをすることがある。彼女の癖がうつってしまったのだ。

「彼」と「彼女」の分身関係（鏡像関係）が濃密に図示されているであろう。「彼は笑う」、「彼女も笑う」……。「彼」が鏡に向かって笑うと、鏡の中の「彼」も笑って応える、「彼」と「彼女」はそのような鏡像関係にあるのだ。笑うという、外に表出されたしぐさにおいて、彼らが分身関係にあるだけではないことは言を俟たない。親密に笑いを表出し合う、以心伝心の精神的な双子、同一の心のかたちを分かち合う精神的な双子。「彼」の意識のアンテナがキャッチすることが出来ない、「飛行機」についての「彼」の〈ひとりごと〉。「空中に浮かんだ架空の物体」の長さを測る「彼女」の〈癖〉（無意識のしぐさ）。「彼女」のその奇妙な〈癖〉が「うつってしまった」て、鏡像のように同じしぐさをしてしまう「彼」……。

「彼」の〈飛行機〉についての〈ひとりごと〉に応えるかのように、「空中に浮かんだ架空の物体」の長さを測る〈癖〉を露出する「彼女」。この鏡像関係を逆から見れば、「空中に浮かんだ架空の物体」の長さを測る「彼女」の〈癖〉に触発されたかのように、〈飛行機〉の〈ひとりごと〉を言ってしまう「彼」という分身関係が成立している、と言えるだろう。

「彼女」の〈癖〉（無意識の身振り）が「うつってしまった」て、同じしぐさをしてしまう「彼」……。無限に乱反射する鏡像に他ならない。

心の奥深くに、ひそかに〈飛行機〉を閉じ込めていた精神的な双子。「彼」と「彼女」の分身関係を通して、〈飛行機〉を心の奥底に沈め込まざるを得ない心のありかた、〈飛行機〉のことを、〈ひとりごと〉、〈癖〉という無意識の言葉、身振りで表出してしまう心のかたちを描き出したのが、『飛行機』という、静まり返った魅力をたたえた作品であろう。

「私も子供のころはよくひとりごとを言ったわ」

彼は思う。そう、その頃、僕はまるで詩を読むようにひとりごとを言っていたのだ。

『飛行機』の物語内容を語り出している現在の「彼」は、既に、〈ひとりごと〉を言わない存在になっているのだ。あるいは、「言おうと思っても言えなくなつて」しまつているのだ。〈ひとりごと〉を言わなくなったその「彼」が、「その頃」(二十歳になつたばかり)の頃)の、〈ひとりごと〉を言つていた「彼」自身を語り出しているのである。語り出された「彼」と分身関係にある「彼女」は、〈ひとりごと〉を「まったく言わなくなつてしまつたの。いつの間にか、言おうと思つても言えなくなつてしまつたのよ」という「彼女」であるが、その「彼女」も、かつてはよく〈ひとりごと〉言つていたというのだ。タイム・ラグの鏡像関係に他ならない。入れ子構造のような分身関係。〈ひとりごと〉を言つていた「彼女」↓〈ひとりごと〉を言わなくなった「彼女」(〈ひとりごと〉を言つていた「彼」)↓〈ひとりごと〉を言わなくなった「彼」。タイム・ラグによつて提示した分身関係に、何を託しているのであろうか。

「すぐくはつきりと話すのよ。本当に覚えてないの？」と彼女は言う。
「覚えてないな」

「彼」の〈ひとりごと〉(無意識的言語)を、「彼女」がボールペンでメモ用紙に書き取るのである。「彼」の無意識的な言葉を意識的な言葉に変換するのが、「彼女」の役柄だと考えられる。『飛行機』の表層的構造では確実にそうなつている。しかし、「彼」は、本当に、〈ひとりごと〉を言つたのであろうか。

「書き終えると、女はテーブル越しにそのメモ用紙を差し出した。彼はそれを受け取つた」。「彼」の〈ひとりごと〉が、実は、「彼女」から「彼」に差し出された、「彼女」自身の〈ひとりごと〉であることが暗示されているのではなからうか。「あなたはまるで詩を読むみたいにひとりごとを言うのよ」

彼女はそう言つてから少し赤くなつた。どうして僕のひとりごとで彼女が赤くなるんだらうと思つと、彼はなんと

なくおかしくなった。

作中人物である「彼」には、作者の仕掛けが分からないのだ。だから、「彼」は、「彼女」が赤面する理由を、「どうして」と訝るしかないのである。「僕のひとりごとで彼女が赤くな」らなければならぬ理由は、作品の表層的構造には見当らないのである。「飛行機」についての「ひとりごと」が、「彼女」自身の「ひとりごと」、「彼女」が「いつの間にか、言おうと思っても言えなくなってしまった」「ひとりごと」だと考える他ないのである。それが作品の深層的な構造であろう。

その午後、彼女が訊ねた。「ねえ、あなた昔からひとりごとと言う癖があったの？」彼女はまるでふと思いついたように、テーブルから静かに顔を上げてそう言った。でもそれがふとした気まぐれで思いつかれた質問でないことは明らかだった。彼女はおそらくそれについてずっと考えていたのだ。彼女の声にはそういう場合につきものの、少しかすれたような固い響きがあった。実際に口に出されるまでに、その言葉は彼女の舌の上で何度も何度もためらいがちに転がされていたのだ。

他者の心の構造の秘密（意識的な自己と無意識的な自己のずれ）に言及することに、ためらい、自己葛藤が伴うのは当然であろうが、「彼」の語りそれ自体が、「彼女」の発語がその種の発語ではないことを示唆しているであろう。自己抑圧して、自分の心の奥深くに沈め込んでいる心のかたち（秘密）、それを自己表出するときの強い内省的緊張。「ふと思いついたように」（たいしたことではない、とさりげなさを装って）、自己表出の緊張を和らげようとするのだが、それでも、対的に緊張してしまう、その葛藤を断ち切って発せられた、「ねえ、あなた昔からひとりごとと言う癖があったの？」という発語。熟慮とためらいを振り切った自己表現。「彼女」は、心の奥底に抑圧していた「ひとりごと」を意識的に表出しようとしているのだ。

そう考えれば、「彼」が言ったという「ひとりごと」を、「彼女」が、「私、ちゃんと全部そらで覚えてるのよ」と言い、

「ゆつくりと、しかしつつかえたり休んだりすることもなく」「ボールペンを動かしつつづけ」て書き記すことが可能だった理由が実によく理解できるであろう。「彼女」自身の、「言おうと思っても言えなくなってしまう」「ていた〈ひとりごと〉を、「彼女」自らメモ用紙の上に書き記しているに過ぎないのである。

〈ひとりごと〉を言う〈癖〉のある「彼」とは、捨て去ったはずの、かつての「彼女」に他ならない。だから、「彼女」は、「彼」の中に、「彼女」自身の心の暗闇に抑圧していた自我を見いだしていた、と言えるのだ。「彼」との出会い（関係）によって、失われた自己を取り戻そうとしているのである。捨て去ったはずの自己の現前（「彼」）に、ナルシスティックに同一化することで、自己回復を試みようとしているのだ。

「彼」との出会い（関係）に促されて、「彼女」の抑圧されていた自我（〈ひとりごと〉）を解放させることが可能になっているのである。「彼女」の〈ひとりごと〉を表出し、言語化するための媒介者、それが「彼」の真の役柄である。

「彼も女も同じことを考えていた。飛行機のことをだ。彼の心が森の奥で作っている飛行機のこと。……、互いが意識化（言語化）することが出来ないでいた心の奥底の〈飛行機〉。〈飛行機〉は何を象徴しているのか。〈飛行機〉を自我の奥底に禁圧せざるを得ない生のかたちを追跡すべきであろう。女性、（専業）主婦が直面せざるを得ない抑圧の構造に行き当たるとはならずだ。

「私も子供のころはよくひとりごとを言ったわ」と言う「彼女」。「ねえ、あなた昔からひとりごとと言う癖があったの？」と問い掛けていたはずの「彼女」が、「私も」と、「彼」を「彼女」の分身に仕立て上げること、で、「彼」の不明確な〈ひとりごと〉を自明の前提事項にしてしまっているのである。「彼女」の分身の自己産出。「彼」をまるで子供扱いするかのよう、そして、〈ひとりごと〉を言うことが、あたかも子供の特権であるかのように発話する「彼女」。

「二十歳になったばかり」で、「まだできたての泥のように若」かった「彼」は、まさに子供と言う他あるまい。回想さ

れた「彼」には子供のイメージが付きまどっているのである。「子供のころはよくひとりごとを言っ」ていた「彼女」の分身としての「彼」。

明確な自意識がまだ形成されていない子供、自分を客観視するもう一人の自分を持たない即自存在としての子供。子供の〈ひとりごと〉が発語される磁場である。空想世界（物語）をヒーローになってリアルに生きているロマンチストである子供の〈ひとりごと〉は、だから、現実と空想（物語・夢）が緋い交ぜになった、「まだできたての泥のように」柔らかい自我の表出、言わば、子供の〈詩〉の表白だと言えるであろう。内省的な自己が未確立な、自己と外界の区分けが不十分な子供。〈ひとりごと〉は、そのような子供の自然な自己劇化の発語だと言えよう。英雄感と挫折感の間を極端に揺れ動く心をリアル・タイムに表出してしまうのである。

「でもお母さんにおされたの。みっともないからって。それでひとりごとを言うたびにきつく叱られたの。押し入れに入れられるとかね。押し入れってとても怖かった。暗くて、黴臭い匂いがして。叩かれたこともあった。物差しで膝を叩くの。それで、そのうちにひとりごとというものを言わなくなってしまったの。まったく言わなくなってしまったの。いつの間にか、言おうと思っても言えなくなってしまったのよ」

大人になることの意味、社会的存在になることの意味が語られているであろう。「彼女」にとって、親（それが、他ならぬ母親であったことは、妻・母親である「彼女」の心のかたちを析出するときのために記憶しておくべきであろう）は、社会（現実）そのもの、社会規範そのものであったはずだ。母親は権力を持った抑圧者として、「まだできたての泥のように」柔らかい「彼女」の自我を内と外に切り分けようとしたのである。物語が物語でしかないこと、〈詩〉は、「暗くて、黴臭い匂い」がする押し入れ（心の奥底の無意識の暗闇）に閉じ込めなければならぬことを、社会の力の権化として、強制的に教えたのである。内的な自己と他者に見せる自己という二つの顔を持ち、それを使い分ける術。内なる自己（本当

の自己)は他者の眼から隠すべき秘密であること、他者に見せる顔は仮面を被った偽りの自己であること。母親はそのことを暴力的に教え込んだのである。

「彼女」が「暗くて、黴臭い匂い」がする押し入れに閉じ込められたように、〈ひとりごと〉を「みっともない」こととして、無意識の暗闇に閉じ込める自己のかたちを形成すること、それが、言わば、我々が大人になるということなのである。子供から脱皮して、大人になるとは、自分の〈詩〉を禁圧される／禁圧することに他ならない。社会化された大人、それは、社会によって抑圧され、仮面を被った偽りの生を生きる縮小された存在に他ならない。社会的規範、現実(日常性)の種々相(細部、繰り返し)のなかに、自分の子供性、言わば、自分の〈詩〉(〈ひとりごと〉)を埋没させざるを得ないのである。

〈ひとりごと〉を禁圧する現実(日常性)の象徴が、作品の題名の〈飛行機〉と対関係にある〈電車〉であろう。そして、〈電車〉と補完関係にある〈時計〉。「すぐ近くの線路の上」を通り過ぎていく〈電車〉。「話をするあいだ何度も何度も窓の外」を通り過ぎていく〈電車〉……。この〈電車〉から、旅という非日常性(〈詩〉)が連想されるであろうか。通勤、買物などの近距離移動のための〈電車〉。現実(日常性)そのものの象徴と言う他あるまい。決められた軌道の上を、機械的に、繰り返し、繰り返し移動するだけの〈電車〉。〈詩〉を無効化し、解体させていく、同じことの繰り返し。〈電車〉は、我々が埋没するルーティンそのものなのである。

しかし、『飛行機』における〈電車〉を、我々の〈詩〉を埋没させる日常性の堆積、ルーティンの連続の象徴、と一般化してよいであろうか。

彼女が時計を見ると、窓の近くを電車が通った。不思議なことに、彼女が時計に眼をやるといつも決まって電車の音がした。まるで宿命的な条件反射みたいに。彼女が時計を見る——電車が通る。

レールの上を、時刻表どおりに（定まった時間間隔で）、「何度も何度も」通り過ぎる〈電車〉と補完関係にある〈時計〉。〈時計〉こそが〈電車〉を動かしている、と言っても過言ではない。〈時計〉の動きが、ルーティン化された〈電車〉の移動を生み出しているのである。その意味で、「彼女が時計を見る——電車が通る」が、「まるで条件反射みたい」なのは当然なのである。『飛行機』という作品の生理としては、「彼女」が〈時計〉を見る身振りが、〈電車〉の機械的な通過を作り出しているのである。

「彼女」がしばしば〈時計〉に眼をやるのは、「彼女」がルーティンに繋ぎ止められ、従属させられているからである。〈時計〉こそが、「彼女」をルーティン（日常性）に従属させる凶器だと言えるであろう。「彼女」の〈詩〉の活力を奪い、枯渇させるものは、眼に見える時間なのである。専業主婦である「彼女」。眼に見える時間（〈時計〉）が、主婦としての「彼女」の決まりきった家事労働を産出しているのだと言えよう。同じところを、「何度も何度も」、行ったり来たりするだけの〈電車〉のような家事労働。

彼女が時計を見るのは、四つになる女の子が幼稚園から戻ってくる時間を確かめるためだった。

「彼女」の家族（夫と娘）が不在である時間帯に、「彼女」の主婦としての生の場所、現実の生活空間である家庭に、「彼」を迎え入れているのである。したがって、自己の奥深くに「彼」を迎え入れている間の、「彼女」の女性の顔の背後に、母親としてのもう一つの顔が見え隠れしているのは当然であろう。「その奇妙な交わりが終わると、彼女はいつもちらりと時計を見た。彼の腕の中で顔をちよつと背けるようにして、枕もとの時計を見るのだ。」、母親としての顔を後景に退かせることで可能になった「彼」とのセックス、その「彼女」が母親の顔を前景化させているのである。「四つになる女の子が幼稚園から戻ってくる時間を確かめるため」に〈時計〉を見るのだから。子供の世話というルーティン（家庭労働）を、女であるがゆえに（それだけの理由で）、性別役割分担として押しつけられているのである。ここでの〈時計〉は、「彼女」

を、母親らしさの社会規範、女性の性役割に引き戻す強制力として、時を刻んでいるのだと言えよう。

不在であるがゆえに、『飛行機』において、主体として、直接的には描かれることのない夫。しかし、「彼女」の家庭が作品の場になっているから、不在ではあっても、夫の存在の気配（影）は濃密に漂っているのだ。「彼は少し前から吸う煙草をセブンスターに変えていた。彼女の夫がセブンスターを吸っていたからだ。彼はそれまでずっとシヨート・ホープを吸っていた。彼女が同じ煙草にしてくれと言ったわけではない。彼が自分で気をきかせて変えたのだ。その方が何かと便利に違いないと思って」。言葉にしない、感性的な次元で、「彼」と「彼女」が双方向的に、夫の存在を感じ合っているのである。不在であることが、逆に、その存在意味を強調しているのだと言えよう。隠微な存在様態だからこそ、生々しい存在感を示す夫。「女の子が幼稚園から戻って」来てから数時間後には、その夫も帰宅するはずだ。（「海外旅行を専門にする旅行会社」に勤務している夫は、「月の半分近くは家を留守にしていた」のであるが）夫を迎える時、「彼女」は、妻の顔を取り戻さなければならぬはずである。

「女」（「俺はだいたいこの女に愛情を抱いているのだろうか」という具合に、「彼」が「彼女」を「女」と意識しているのである）としての「彼女」は、専業主婦としての家事労働（ルーティン）に縛られた、妻、母という性役割を担わされた存在である。女性であるがゆえに、妻としての、母としてのルーティンに縛りつけられている「彼女」。妻の顔、母親の顔を見え隠れさせている「彼女」との「肉体の触れ合い」。「二十歳になったばかり」の「彼」にとって、そうした「彼女」との触れ合いが、「それまでに経験したどのようなセックスとも異なっていた」のは当然かも知れない。「肉体の触れ合い」を持っている「女」が、妻、母親の顔（性役割）を合わせ持っていることが、「彼」には、奇妙で、不可思議な経験なのだ。

「二十歳になったばかり」の「彼」には、女性の「結婚生活における問題」というものがよく分からないのである。「まだできたての泥のように若い」「彼」の自我は、「彼女」の「結婚生活における問題」を映し出す格好の白紙のスクリーン

として機能する他ない。女らしさ(妻らしさ)、母親らしさ)の規範(性役割)、ルーティンによつて、「彼女」の自分らしさ(本当の自分)が抑圧され、《詩》が失われていく不安と虚しさ。自己実現から疎外され、「どこにも行けないのかもしれない」という不安に陥り、自己枯渇感に苦しむ「彼女」。「彼」は、「彼女」のこうした不安、虚しさを映し出す鏡なのである。

夫はオペラが好きらしくて、家にはヴェルディやらプッチーニやらドニゼッティやらリヒャルト・シュトラウスやらの三枚組、四枚組の分厚いレコードが、作曲家別に整理されてずらりと並んでいた。それはレコード・コレクションというよりは、むしろある種の世界観の象徴のように見えた。それは物静かで、とても確固としているように見えた。彼は言葉に窮したときやなんとなく手持ち無沙汰なときには、いつもそのレコードの背中の文字を目で追ったものだった。右から左に、そして左から右に。

「彼」のこの眼の動きは、「彼女」の視線の代行的な視線と考えられる。「彼女」の視線を内面化した視線。共犯意識のある視線。「そういった種類の音楽をこれまで一度として聴いたことはなかった」という「彼」と、「嫌いじゃないわよ」、「でも長すぎる」と言う「彼女」。「彼」と「彼女」は共犯関係で、夫のレコード・コレクションに這うような視線を注いでいるのである。そして、その横にある「なかなか立派なステレオ装置」……。外国製の大きな真空管アンプがよく統御された甲殻動物のように、重々しく身をかがめて命令を待っていた。どちらかといえばつましい他の調度品のなかにあって、それはどうしようもなく目立った。存在感そのものが際立っていた。ついそこに目がいつてしまうのだ。」というステレオ装置。夫のこのステレオ装置に対しても、「彼女は電源スイッチの位置さえ知らなかったし、彼もあえてそれに手を触れたいとは思わなかった。」という共犯関係にある距離を置いているのである。ステレオ装置の価値を剝奪し、無効化しようとする共犯意識。

「彼」と「彼女」は、その共犯（分身）関係によって、何を無効化しようとしているのであろうか。彼らが異議申し立てをしているのは何に対してなのであろうか（その主体は「彼女」であり、「彼」は「彼女」のその意思を映し出す鏡に過ぎないのであるが）。部屋に招き入れた「彼」を前にして、「ほっそりとした白い指でコーヒー・スプーンの柄をいじりつづけ」といった身振り。その身振りには、「時間はかかるけれど、そこからとにかくほぐしていかざるをえないのだ」という「彼女」の思いが込められているのであるが、「彼女」が解きほぐそうとしている何かは、「彼女」が異議申し立てをしようとしている何かと同じであるはずである。「なんだか事務的に、とても無感動に」、異議申し立てし、価値剝奪しようとしている何かの前で、「彼女」はあまりに無力なのだ。「彼女」の自我は眠りかけているのである。

「彼女」の〈ひとりごと〉を、「みっともない」こととして、暴力的に禁圧した母親。この母親は、社会規範を内面化した、言わば、父親の権威の代行者としての母親だと言えるであろう。母親が娘に権力的に介入して禁圧したところに端的に示されているように、『飛行機』に描かれている問題は、女性の抑圧の構造である。母親が威圧的に揮った権威（社会規範）を、今度は、「彼女」の夫が体現しているのだと言えよう。「彼女」の人格（「世界観」）を拒絶し、疎外しているような、夫のレコード・コレクションとステレオ装置。「レコード・コレクションというよりは、むしろある種の世界観の象徴のように見える」、「作曲家別に整理されずらりと並べられているレコード・コレクション。世界を秩序化（区分け）し、構造化する権力的な男性原理（男性の「世界観」）の象徴が、夫のレコード・コレクションである。それは「とても確固として」いて、女性の自己実現を抑圧し、女性の自我を眠らせる圧力になるのだ。「存在感そのものが際立っていた」ステレオ装置も、威圧的に武装した男性兵士のようなイメージで描かれているのである。男性中心社会の規範（「世界観」）に抑圧され、自我が眠りかけている「彼女」……。

「今でも何かふと言葉が出そうになっても、反射的にそれを飲み込んでしまうの。子供の頃に叱られたせいで。でも

わからないわ。ひとりごとを言うことのいったいどこがいけないのかしら？ 言葉が自然に出てくるというだけのことでしよう。今お母さんが生きていたら訊いてみたいくらい。どこがいけないのかって」

〈ひとりごと〉を言うことのどこがいけないのか、〈ひとりごと〉を何故禁圧しなければならないのか、自己納得するところが出来なかった「彼女」。自己納得出来ないのに、問い質すことすら出来なかった無力な「彼女」。それと同じように、大人になった今も、男性中心社会の規範、男性原理に何故従属しなければならないのか、「彼女」には理解出来ないのだ。しかし、「とても確固として」いる規範の圧力の前で、自我を自覚めさせておけば、自己葛藤が大きいから、「彼女」は、自我を眠らせるしかないのである。〈ひとりごと〉を禁圧されて、内なる本当の自己を仮面の下に隠したように、大人になった「彼女」は、自分らしい自分を仮面の下に隠して、欺瞞的な偽りの自己を家族に見せているのである。

家庭に問題があるわけではないのだ、と女は彼に言った。何度も繰り返してそう言った。夫は優しくいい人だし、子供のこともとても愛している、たぶん私は幸せなんだと思う、彼女は穏やかに、淡々とした口調でそう言った。そこには言い訳がましい響きはなかった。彼女は交通規則や日付変更線について話すみたいに客観的に結婚生活について語った。私は幸せなんだと思う、問題と呼べるような問題は何もないのよ、と。

家庭の幸せ、結婚生活の幸せを、「彼女」の感情が納得してはいないのだ。幸せだと、心の底から感じられてはいないのである。女性の性別役割（仮面）を受け入れて、妻・母としての自己に居座ってしまえば、結婚生活に、「問題と呼べるような問題は何もない」はずなのである。自分らしい自分を眠らせてしまえば問題は無いのだ。「私は幸せなんだ」と感情で納得出来ないのは、仮面との間に距離を感じてしまうからである。「私は幸せなんだと思う」と、無感動に自己を客体化する「彼女」は、生きる感動から疎外された無力な存在なのだ。

本当の自分を、妻の顔・母の顔の下に隠して、偽りの生を生きる「彼女」は、自己実現の可能性を押し殺した空洞化し

た存在だと言えよう。「このままもう俺はどこにも行けないのかもしれない」という「彼」の欠落感、自己喪失感には、「どこにも行けない」、同じ線路の上を行ったり来たりするだけの〈電車〉のような「彼女」の心が投影されているのである。たぶん彼女はただ泣きたかったから泣いたのだ。あるいは彼女はただ誰かに抱かれて泣きたいため僕とつきあっているのかもしれない、彼はそう思うことさえあった。彼女はひよつとしてひとり泣くことができなくて、それですのために僕を必要としているんじゃないだろうか。

泣くのが目的のセックスであるかのような「彼女」の性的交わり。性愛的な欲望からのセックスでないことは間違いない。〈ひとりごと〉（「彼女」の〈詩〉）を言いたいのに言えない心の不満、〈ひとりごと〉を禁圧された自己抑圧感を、泣くという感情的な自己表現で表出しているのである。「彼」との身体的な交わりは、それ以上の重み、意味を持つものではないだろう。〈ひとりごと〉を言いたい欲求の代行為としてのセックスでしかない。

「二人の肉体の触れ合いはいつも物静かでひっそりとしたものだった。そこには正確な意味での肉の喜びというものはなかった。もちろん男と女が交わることの喜びがなかったと言ったら、それは嘘になる。でも、そこにはあまりにも多くの別の思いと要素と様式がいりまじりすぎていた」。「彼」に抱かれて泣くことで、自分らしい、本当の自分を解放しようとしているのであるが、言語化されないその身体的表現は、真の自己解放にはつながらないのである。分身に「抱かれて泣く」ことで、夫が象徴的に体現している社会規範の風圧をやり過ぎそうとするのは、自閉的な自己世界に閉じこもることではないのかも知れない。

「彼」に「抱かれて泣く」という逸脱行為においてしか目覚めることの出来ない「彼女」。自己の存在の目覚めを、泣く、セックスという、言語化されることのない、身体的（感情的）な形でしか自己表現出来ない「彼女」。主婦の仮面は揺らぎ、主婦役割の中の「彼女」の真の自我は枯渇感にあえいでいるのである。「存在そのものが際立って」いるステレオ装

置を専有する夫は、妻の仮面の揺らぎも、妻の逸脱行為も、妻の自己枯渴感も知らないまま（知ろうともしないで）、「あの種の世界観」に居座り続けるに違いない。

「詩を読むように」言語化した、〈飛行機〉の〈ひとりごと〉……。同じところ（同じレールの上）を行ったり来たりするだけで、「どこにも行けない」〈電車〉と対比的な〈飛行機〉。翼で大空に飛び立つ〈飛行機〉についての〈ひとりごと〉には、「彼女」の主婦としてのルーティン、日常的現実からの離陸の願望が託されているであろう。「人の心というのは、深い井戸みたいなものじゃないかって思うの。何が底にあるのかは誰にもわからない。ときどきそこから浮かびあがってくるものの形から想像するしかないのよ」と言う「彼女」。「浮かびあがってくるものの形」〈飛行機〉から想像する他ない、「彼女」の「深い井戸みたい」な心の奥底、そこには、妻として、母として抑圧される拘束感、自己枯渴感から解放されたい願望がわだかまっているのだ。主婦としての女性の眠り／目覚め……。